

インターネット利用行動と 交友ネットワーク・一般的信頼・情報ハンドリング力との関係 Relation between the Internet behavior and friendship networks / general social trust / information handling skills

戸田 里和 ◎
Satowa TODA

上智大学大学院文学研究科新聞学専攻 Sophia University Graduate School Department of Journalism

要旨…本研究は、大学生のネットの使い方や、その学生生活（交友ネットワーク・一般的信頼・情報ハンドリング力）の影響について実態を明らかにし、かつ因果関係を解明するため2波のパネル調査を行った。その結果、「交友ネットワーク→携帯ネット利用」「情報ハンドリング力→携帯ネット利用」では、正の相関関係が、「携帯ネット利用→一般的信頼」では、負の相関関係がそれぞれ一方向的に示された。

キーワード インターネット利用行動, 交友ネットワーク, 一般的信頼, 情報ハンドリング力, パネル調査

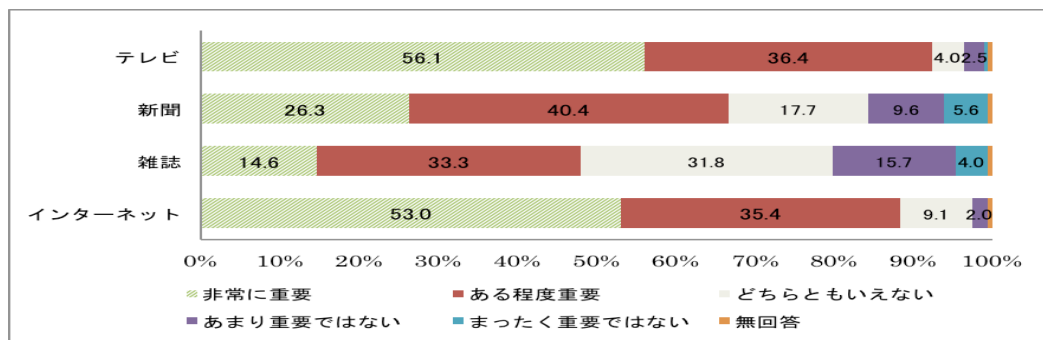
1. はじめに

ICTの急速な進化に代表されるスマートフォン、タブレット端末、ソーシャルメディア、クラウド等の普及は、私たちのライフスタイル、ワークスタイルの幅広い場面において変化をもたらし、若者のネット依存やネットリテラシーなどの問題に注目が集まっている。また近年は、若者の社会的自立の遅れや社会関心・関係の希薄化という課題も相まって、メディア研究以外にも、教育学・心理学・社会学・経営学など、さまざまな分野で研究者が枠を超えてICTに対する問題意識を共有し、研究することが求められている。

そこで本研究では、インターネット利用行動の現状把握と、社会的自立に向けた学生支援に資する知見を蓄積するために、学生のインターネット利用行動と意識や態度にどのような関連がみられるかという視座のもと検討を進める。具体的には、大学生はどのようなネットの使い方をしているのか、学生生活（交友ネットワーク・一般的信頼・情報ハンドリング力）にどのような影響が出ているか、などの実態を明らかにし、かつ因果関係を解明することを目指す。因果関係の検証方法は、高比良ら(2006)、橋元ら(2014)先行研究を参考に、2波のパネルデータを「交差遅れ効果モデル」(Cross-lagged effect model)を用いて検討する。

2. 大学生の情報入手手段とインターネット利用内容

「イマドキ大学生はインターネット活用が当たり前」という某社のキャッチコピーのとおり、授業中でさえもインターネットに接続する学生が多く見受けられるようになった。このような中で、大学生が考える情報入手手段としてのメディアの重要性にはどのような特徴がみられるか。筆者が2013年6月に行った静岡県内のA大学1年生を対象にした調査結果を【図表1】示す。

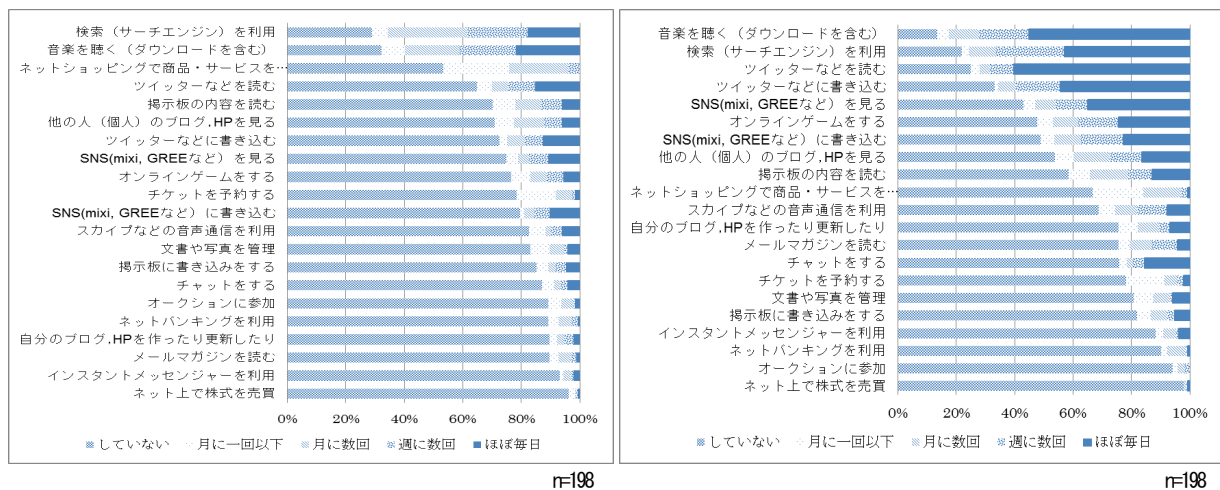


図表1. 情報入手手段としてのメディアの重要性

n=197

回答分布を示したものは、情報入手手段としての評価は「テレビ」がもっとも高く「非常に重要」「ある程度重要」を合わせて 92.5%となり 9 割を超える。「ネット」が 88.4%と続き、「新聞」66.7%、「雑誌」47.9%の順となっている。橋元(編)(2011)『日本人の情報行動 2010』(以下 2010 調査と略す)では、「テレビ」「新聞」「ネット」の順であったが、学生は、「テレビ」「ネット」「新聞」の順となった。2010 調査では、「このままインターネットの評価が伸び続ければ、5年後には逆転することになるだろう」¹と述べていたが、すでに逆転している結果が示された。

では、情報入手手段において重要なメディアとして位置づけたインターネットを学生はどのように使っているのだろうか。同調査時に行ったパソコンと携帯によるネット利用内容を「していない」を基準に表わしたものを【図表2】に示す。これらの比較からもわかるとおり、学生は携帯を中心としたネット利用行動となっている。また、同調査時に行ったパソコンと携帯によるネット利用内容の因子分析では、異なった結果が示された。したがって、ネット利用による影響をみる場合、機器別・用途別に検討する必要があるといえよう。



図表2 パソコン(左図)・携帯(右図)によるネット利用「していない」基準による比較

3. 研究の方法

3-1. 調査対象者と調査時期

静岡県内の私立A大学の1年生を対象に2波のパネル調査を行った。本研究では、1時点目と2時点目両時点で回答している80名(男子68名、女子12名)²を分析の対象とした。第1回調査は2013年6月、第2回調査は12月に実施した。

3-2. 調査項目

(1) インターネット利用行動

橋元(編)(2011)『日本人の情報行動 2010』のパソコンと携帯電話(スマートフォン・PHSを含む)によるインターネット利用全般21項目を³、「ほぼ毎日する」「週に数回」「月に数回」「月に1回以下」「していない」の5件法で回答を求めた。

(2) 交友ネットワーク

藤村(1998)と梅崎・田澤(2013)の調査票を参考に、現在とくにつきあいがあり、友達と呼べるような人たちの人数を「入学前から」「学内の学科・クラス」「学内のサークル・部活」「学外の趣味など」「アルバイトなど」「住んでいる近所」の6つの関係ごとに尋ねた。「1人」「2人」「3~5人」「6~9人」「10人以上」「なし」の6つからそれぞれ1つずつ選ぶよう求めた。

(3) 一般的信頼

山岸(1998)の一般的信頼尺度(6項目)から「ほとんど人は基本的に正直である」「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの

¹ 橋元良明(編)(2011)『日本人の情報行動2010』東京大学出版会、p110。

² 第1回調査のフェイスシートで、年齢や国籍を確認したため、社会人試験経路の者、外国人留学生は含まれていない。平均年齢は、183歳(SD=64)であった。

³ 橋元良明(編)(2011)、前掲書、pp351-352。なお、21項目の内容は【図表2】を参照されたい。

⁴ 山岸俊男(1998)『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会、p92。

人は基本的に善良で親切である」「ほとんどの人は他人を信頼している」「私は、人を信頼するほうである」の5項目について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どれもいえない」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の5件法で回答を求めた。

(4) 情報ハンドリング力

木村(2001)の情報ハンドリング力尺度(5項目)⁵、「情報収集力：情報を集める自分なりの方法をもっている」「情報選択力：たくさんある情報の中から、自分の必要とする情報を取捨選択できる」「情報探索力：関心ある情報を多少苦労しても自分であれこれ探すのが好きだ」「情報伝達力：他人とのやりとりや仕事でのやりとりで、必要なことをきちんと相手に伝えられる」「共創力：皆でいろいろな意見を出し合いながら新しいことを生み出すのが好きだ」について、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(5) フェイスシート

第1回調査では、学籍番号、年齢、性別、居住形態、居住地域、出身地、国籍の記入を求め、第2回調査では、学籍番号のみ記入を求めた。

3-3. データの得点化

(1) インターネット利用行動(ネット利用程度)

インターネット利用行動21項目からネット利用程度として得点化するために、「ほぼ毎日する」4点から「していない」0点と順に得点化しパソコンと携帯のネット利用得点をそれぞれ求めた。

(2) 交友ネットワーク(交友程度)

交友ネットワーク6項目から交友程度として得点化するために、「1人」1点「2人」2点「3~5人」3点「6~9人」4点「10人以上」5点「なし」0点として6項目の合計得点を求めた。

(3) 一般的信頼(信頼程度)

一般的信頼尺度5項目から信頼程度として得点化するために、「そう思う」5点から「そう思わない」1点として5項目の合計得点を求めた⁶。

(4) 情報ハンドリング力(情報活用力程度)

情報ハンドリング力尺度5項目から情報活用力程度として得点化するために、「あてはまる」5点から「あてはまらない」1点として5項目の合計得点を求めた。

3-4. データのグループ化

論点の錯綜化を避けるため、調査対象者のインターネット利用頻度の高いサービス・コンテンツをグループ化する。橋元ら(2013)の分類を参考にインターネット利用内容の合成変数を以下のとおり作成した。同期性・双方向性の高いもの「チャット・メッセージング・スカイプ」、同期性・双方向性のやや低いもの「SNS・掲示板・ツイッター」、情報閲覧が中心となるもの「ブログ・HP・メールマガジン」として3つにまとめる。また、「検索」「音楽」「オンラインゲーム」の3つは単体で扱い、合計6つのサービス・コンテンツを分析に使用する。

3-5. 交差遅れ効果モデル

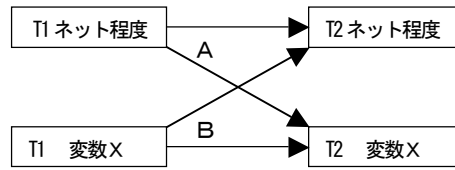
縦断調査の一形態であるパネル調査から、変数間の因果関係を分析するうえで一般的に用いられるのが「交差遅れ効果モデル」である(高比良ら,2006;橋元ら,2014)。「交差遅れ効果モデル」では、パネル調査による2時点のデータで、【図表3】に示すとおり、異なる時点(T1、T2)における変数の関係を分析し、因果関係を推定する。

本研究では、T2時点のパソコン・携帯によるネット利用程度と変数X(交友程度・信頼程度・情報活用力程度)それぞれを目的変数とする重回帰分析を用い、【図表3】におけるパスAとパスBの値を求めることとする⁷。

⁵ 木村忠正(2001)『デジタルデバイスとは何か』岩波書店、pp206-261。東京大学大学院情報学環(編)(2006)『日本人の情報行動2005』東京大学出版会、p110。

⁶ 一般的信頼と情報ハンドリング力の両尺度は、主成分分析を行った結果、1因子構造が妥当であると考えられた。

⁷ 重回帰分析では、「性別」(男子=1,女子=0)を統制変数として投入する。また、「他方でのネット利用」についてPCネット利用者の分析時には、「第1回調査の携帯ネット利用程度の有無:T1携帯」、携帯ネット利用者の分析時には、「第1回調査のPCネット利用程度の有無:T1PC」を表す(利用=1,非利用=0)を統制変数として投入する。

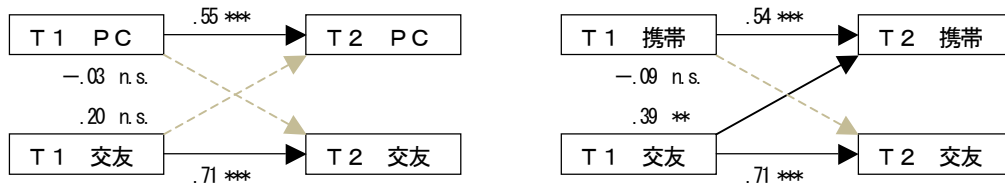


図表3. 交差遅れ効果モデル概念図

4. 結果

4-1. パソコン・携帯のインターネット利用行動と交友ネットワークの関連

パソコン・携帯のネット利用程度と交友程度の関連を検証したところ、「交友程度が高いほど、携帯のネット利用程度が高まる」影響が確認された【図表4】。パソコンのネット利用程度に関しては交友程度による影響はみられなかった【図表4】。

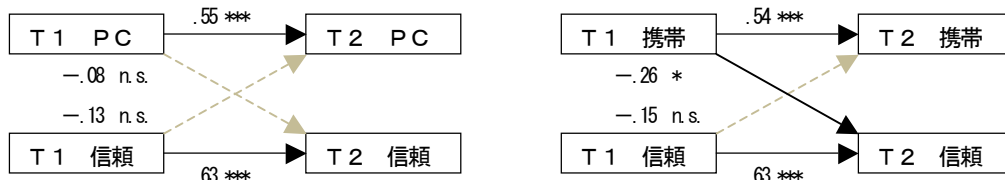


数値は重回帰分析の標準化係数 *** $p < .001$, ** $p < .01$, n.s. 有意性なし

図表4. パソコン・携帯のネット利用程度と交友程度の関係

4-2. パソコン・携帯のインターネット利用行動と一般的信頼の関連

パソコン・携帯のネット利用程度と信頼程度の関連を検証したところ、「携帯のネット利用程度が高いほど、信頼程度が低くなる」影響が確認された【図表5】。パソコンのネット利用程度に関しては信頼程度による影響はみられなかった【図表5】。

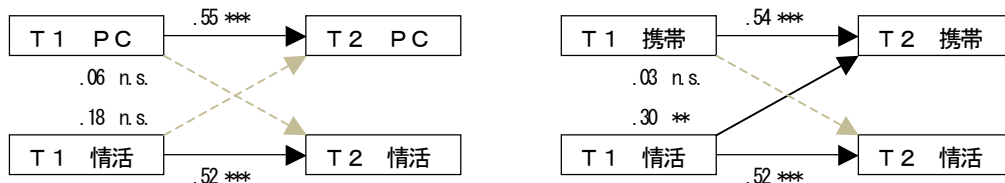


数値は重回帰分析の標準化係数 *** $p < .001$, * $p < .05$, n.s. 有意性なし

図表5. パソコン・携帯のネット利用程度と信頼程度の関係

4-3. パソコン・携帯のインターネット利用行動と情報ハンドリング力の関連

パソコン・携帯のネット利用程度と情報活用力程度の関連を検証したところ、「情報活用力程度が高いほど、携帯のネット利用程度が高まる」影響が確認された【図表6】。パソコンのネット利用程度に関しては情報活用力程度による影響はみられなかった【図表6】。

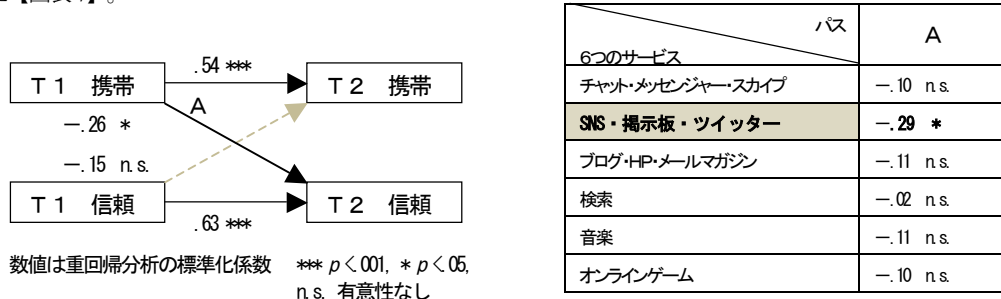


数値は重回帰分析の標準化係数 *** $p < .001$, ** $p < .01$, n.s. 有意性なし

図表6. パソコン・携帯のネット利用程度と情報活用力程度の関係

4-4. 携帯ネット利用サービスと一般的信頼の関連

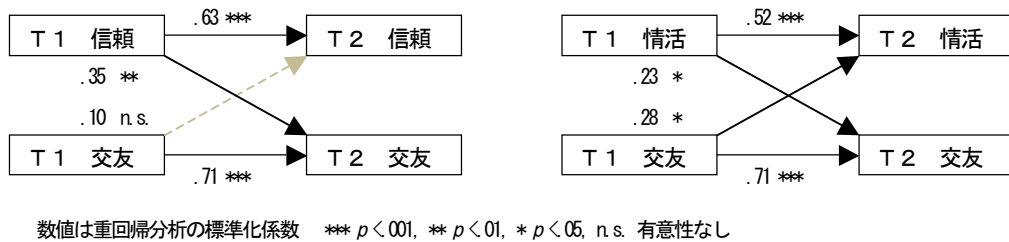
42の結果では、「携帯のネット利用程度が高いほど、信頼程度が低くなる」影響が確認された。ではどのようなサービス・コンテンツが信頼程度を低下させるのだろうか。34でグループ化された6つのサービス・コンテンツ利用頻度と信頼程度との関連を検証したところ、「携帯による『SNS・掲示板・ツイッター』の利用頻度が高いほど、信頼程度が低くなる」影響が確認された【図表7】。



図表7. 携帯ネット利用サービスと信頼程度の関係

4-5. 交友ネットワークと一般的信頼・情報ハンドリング力の関連⁸

前節の結果から、信頼程度を低下させるサービス・コンテンツは、同期生・双方性のやや低いコミュニケーションサービス「SNS・掲示板・ツイッター」であった。では、現実社会の交友ネットワークと一般的信頼・情報ハンドリング力にはどのような関連がみられるだろうか。そこで追加的分析として、交友程度と信頼程度の間を検証をしたところ、「信頼程度が高いほど、交友程度が高まる」影響が確認された【図表8】。また、交友程度と情報活用力程度の間を検証をしたところ、「情報活用力程度が高いほど、交友程度が高まる」と同時に「交友程度が高いほど情報活用力程度が高まる」という双方向的な影響が確認された【図表8】。



図表8. 交友程度と信頼程度・情報活用力程度の関係

5. まとめ

因果検証の結果を以下にまとめる。

- ・交友ネットワークが増えるほど、携帯のネット利用が高まる（一方向）。
- ・携帯のネット利用が高いほど、一般的信頼が低くなる（一方向）。
- ・情報ハンドリング力が高いほど、携帯のネット利用が高まる（一方向）。
- ・携帯のネット利用では、「SNS・掲示板・ツイッター」の利用頻度が高いほど、一般的信頼が低くなる（一方向）。
- ・パソコンからのネット利用は、交友ネットワーク、一般的信頼、情報ハンドリング力と明確な関係はみられない。

また、追加的分析では、以下の結果が示された。

- ・一般的信頼が高いほど、交友ネットワークが増える（一方向）。
- ・情報ハンドリング力が高いほど、交友ネットワークが増え、交友ネットワークが増えるほど、情報ハンドリング力が高まる（双方向）。

前述の結果からも明かなように、学生の携帯（スマートフォン）利用は日常化していることがわかる。しかし、いかに携帯（スマートフォン）を使えども、交友ネットワークも情報ハンドリング力も高まらない姿が推察される。そして、学生の身

⁸ ここでは「性別」（男子=1, 女子=0）のみ統制変数として投入する。

体性を欠いたコミュニケーションでは、一般的信頼は高まらず、現実社会に求められる社会関心・関係の養成は、困難であると考察される。

本研究では、調査対象者ならびに調査期間が大学1年次の6月と12月であるため、大学生全体としての課題を捉えきれていないという点で限界がある。今後の学生生活を通じて、情報とのかかわり方やメディアに対する意識が変容する可能性も考えられるため、就職活動開始時期の大学3年次の3月、そして卒業後3年以内に追跡調査を実施するなど、大学生活上の位置とタイミングという観点からも分析する必要があると思われる。

以上の継続的な追跡調査により、ネット利用による学生生活への影響はさらに明らかにされるであろう。引き続き、これから社会の中核となっていくデジタルネイティブ学生らの社会的自立に向けた教育指導と学生支援の方策を探るべく検討を加えていきたい。

参考文献

- 1) 梅崎修・田澤実(2013)『大学生の学びとキャリア——入学前から卒業後までの縦断調査の分析』法政大学出版局
- 2) 木村忠正(2001)『デジタルデバイドとは何か』岩波書店
- 3) ——(2005)「大学生初期利用者に見るSNS(Social Networking Service)と対人信頼感」『日本社会情報学会学会誌』17(2), pp.23-31.
- 4) ——(2012)『デジタルネイティブの時代』平凡社新書
- 5) 玄田有史・曲沼美恵(2004)『ニート——フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎
- 6) 小林哲郎・池田謙一(2008)「PCによるメール利用が社会的寛容性に及ぼす効果：異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目して」『社会心理学研究』24(2), pp.120-130.
- 7) 総務省(2014)『平成26年度版 情報通信白書』<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h26/pdf/index.html> (閲覧日 2014年10月12日)
- 8) 高比良美詠子・安藤玲子・坂元章(2006)「縦断調査による因果関係の推定——インターネット使用と攻撃性の関係」『パーソナリティ研究』15(1), pp.87-102.
- 9) 東京大学社会情報研究所(編)(2006)『日本人の情報行動2005』東京大学出版会
- 10) 富田加久子(2005)『さすなをつなぐメディア——ネット時代の社会関係資本』NTT出版
- 11) 長澤秀行(編著)(2014)『メディアの苦悩——28人の証言』光文社新書
- 12) 日本キャリアデザイン学会(監修)(2014)『キャリアデザイン支援ハンドブック』ナカニシヤ出版
- 13) 橋元良明(編)(2011)『日本人の情報行動2010』東京大学出版会
- 14) ——・辻大介・石井健一・金相美・木村忠正(2002)「『インターネット・パラドクス』の検証——インターネットが精神的健康・社会的ネットワーク形成に及ぼす影響」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』18, pp.335-485.
- 15) ——・(株)電通・電通総研・奥津哉・長尾嘉英・庄野徹(2010)『ネオ・デジタルネイティブの誕生——日本独自の進化を遂げるネット世代』ダイヤモンド社
- 16) ——(編)(2011)『日本人の情報行動2010』東京大学出版会
- 17) ——・小室広佐子・小笠原盛浩・大野志郎・天野美穂子・河井大介・堀川裕介(2013)『インターネット利用と依存に関する研究報告』(平成22年度共同研究報告書)
- 18) ——・小室広佐子・大野志郎・天野美穂子・河井大介・堀川裕介(2014)『インターネット利用と依存に関する研究報告』(平成23年度共同研究報告書)
- 19) 藤村正之(1996)『現代女性のライフスタイルと情報行動——40代・50代を中心に』武蔵大学総合研究所
- 20) 藤原正弘・木村忠正(2009)「インターネット利用行動と一般的信頼・不確実性回避との関係」『日本社会情報学会学会誌』20(2), pp.43-55.
- 21) 山岸俊男(1998)『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会
- 22) ——(1999)『安心社会から信頼社会へ——日本型システムの行方』中公新書
- 23) 山田昌弘(2004)『パラサイト社会のゆくえ——データで読み解く、日本の家族』ちくま新書
- 24) Usaner, M.E. (2004) "Trust, Civic Engagement, and the Internet", *Political Communication*, 21, pp.223-242.